

# チョークの名品 廃業、韓国へ

## 国内外の教師愛用「羽衣文具」

国内外の教師らに愛用された日本のチョークのメーカーが2015年に廃業し、ブランドを韓国人の元塾講師に引き継いだ。名品の製法は韓国に渡り、世界中から注文が相次いでいる。元微用工問題や輸出規制強化で両国の対立が激化する中、新旧の経営者は「日韓はうまくやってほしい」と関係改善を願っている。

## 製法継承、世界から注文



渡部隆康さん

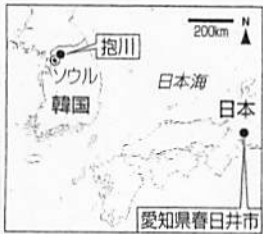
「もっと使いたい」と思ったが韓国では手に入らない。自分で輸入販売しようと思いついた。羽衣文具の社長だった渡部隆康さん(75)に連絡。渡部さんの次女は韓国に留学した経験があり、好意的に契約してくれた。

韓国北部・京畿道抱川にある文具会社「セジヨンモール」の工場では7月、色とりどりのチョークを製造していた。機械油のにおいが漂う中、従業員が工程を見守る。

同社の辛喜錫代表(49)は、塾の数学講師だった十数年前に東京の予備校を見学に訪れた。置いてあったチョークで板書してみると色がきれいで書きやすく、タッチも柔らかくて気に入った。分けてもらったチョークは韓国の塾でも生徒から「見やすい」と好評だった。愛知県春日井市の羽衣文具の製品だった。



自社のチョークを手にして取材に応じる「セジヨンモール」の辛喜錫代表(抱川・抱川市)。



「もっと使いたい」と思ったが韓国では手に入らない。自分で輸入販売しようと思いついた。羽衣文具の社長だった渡部隆康さん(75)に連絡。渡部さんの次女は韓国に留学した経験があり、好意的に契約してくれた。

その後、渡部さんは体調を崩し、後継者もいないため惜しまれつつ廃業した。辛さんは「羽衣ブランドがなくなるといけない」と自分がつくりたいと申し出た。渡部さんは取引を通じて信頼していた辛さんに製法を伝授。工場の機械も売り渡し、韓国での生産が始まった。炭酸カルシウムなど原料

材料は日本から輸入し、渡部さんも太鼓判を押す仕上がりになった。

辛さんは今年に入り、羽衣の品質を世界にPRしようとして、米国の会社に依頼して動画を制作。米国の教授らが、高級車になぞらえて「チョークのロールスロイスだ」などと称賛する内容で、インターネットで公開した動画の再生回数は約1千万回に上った。米国や中国の客から注文が殺到。今年売り上げ目標は10億(約8700万円)だ。渡部さんは「羽衣のチョークが、世の中に残っていてありがたい」と話し、「政治の世界ともつながり世界は違ふ。韓国とうまくやっていければいいんじゃないか」と力を込めた。

9/4 (水) 神戸新聞 夕刊より

日韓関係の悪化が叫ばれる中、身近な所から  
“当たり前を当たり前”にできること続けられること  
きちんと積み重ねていきたいものですね。